
さよならお兄ちゃん

佐井 識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならお兄ちゃん

【Nコード】

N1472L

【作者名】

佐井 識

【あらすじ】

結婚寸前で、婚約者が謎の失踪を遂げた。その15歳の妹・紫野を引き取って暮らし始めた23歳の青年・隆之介。兄になかなか心を開こうとしない妹と、妹にどう接していいのかわからない兄。それでも、残された者同士の絆はゆっくりと育まれていく。そして7年経った春の夜、ふたりは「最後の晚餐」を迎える。紫野から静かに明かされる秘密。それは、15歳だった彼女が生きたために選ばざるをえなかった、悲しい嘘だった。

カテゴリは一応純文学です。ほのかに恋愛要素も含まれますが、基本的には兄と妹の、ぎこちない家族の物語です。

第1話

横断歩道を小走りで渡り終えたところで、紫野の横顔が、隆之介の目に飛び込んだ。20時の約束に、すでに15分以上遅れていた。彼女が指定したのは、駅裏にあるフレンチ・ビストロ。家と反対方向なので隆之介はこれまで知らなかったが、確かに紫野の好きそうな、こじんまりと温そうな店構えだった。

その窓際の席に、紫野はじつと座っていた。携帯電話をいじるでもなく、文庫本を読むでもなく、ただそこに静かに座って、一点を見つめている。ぼんやりしているというより、バリアを張っているという表現がふさわしいように思う。ひとりで何かを待っているときの彼女は、いつもそんなふうだった。まるで野生動物のように、ぴんと意識を張りつめている。賑やかそうな店内で、そこだけ静寂が訪れていた。こんなときの紫野が何を考えているかは、7年一緒に暮らしても、隆之介にはまだわからなかった。

キツ、と音を立てて、自転車が隆之介の真横をすり抜けていく。気付けば、自分は道の端で立ちっぱなしだった。慌てて謝ろうと自転車を目で追ったが、あつという間に夜道へと消えてしまう。店のほうに振り返ったところで、窓越しに紫野と目が合った。またドジな兄だと思われたに違いない。隆之介がばつの悪い笑顔を浮かべると、紫野は小さく会釈した。出会い頭に会釈するクセは、昔から変わらない。家族にしてはよそよそしい気がするが、それでも、うつすら微笑んでくれるようになっただけで、大した進歩と言えるかもしれない。

「ごめん、お待たせしました。先に飲んでてよかったのに」

ようやく席に着き、スーツの上着を脱ぐ。謝る隆之介に、紫野は小さく首を振った。シツクな黒いワンピースが、白い肌によく似合っている。

「こちらこそ、年度末の忙しい時期に、無理に誘っちゃってごめんさい。私は、今、ニートみたいなものだからね。時間は有り余ってるの」

「卒業旅行、行けばよかったのに。友だちに誘われてたんじゃないの？」

「まあ、いろいろ片付けとかあったし……」

そうこうしているうちに、白ワインのボトルが運ばれてきた。紫野は家ではめったに飲まないが、実は結構な酒豪であるらしい。トクトクトクと、心地よい音を立てて、ワインがグラスに注がれていく。面子が揃い、杯が満ち、ディナーの準備が整った。腹は充分に空いていた。

「それに今日、お兄さんと話したかったから」

その言葉の意味を、隆之介はわかっていた。だが今はあえて触れずに、笑顔でグラスを持ちあげる。

「じゃあ……紫野ちゃんの大学卒業に、乾杯」

ふたつのグラスが、チン、と冷たい音を立てた。

「このレバーペースト、ワインによく合う。チーズも美味しいなあ」「そうでしょう。私も来るのは今日で2回目なんだけど。一度お兄さんを連れて来たいと思っていたから、よかった」

「紫野ちゃんが気に入る理由、よくわかるな。美味しいし、雰囲気もいいし、なにより……適正価格だ」

「そう、適正価格。良い言葉だわ」

ニヤリと口角を上げて、紫野がワイングラスに口をつける。なかなかいいペースだ。15歳の彼女を引き取ったのがつい最近のことのように思い出されるのに、こうして酒を酌み交わせるようになるとは。自分も年をとるわけだ。いつまでも若造のような気持ちではないが、隆之介ももう30歳。立派な三十路のサラリーマンになっていた。

それにしても、兄妹ふたりで改まって外食することなど、あまり

なかった。最初の頃は、紫野の誕生日やクリスマスは出かけていたものだが、紫野が大学生になった頃から途切れてしまっている。家ではときどき朝食や夕食と一緒に摂っているとはいえ、互いに忙しく、その機会も減っていた。こと紫野から外食に誘うとなると、はじめのことかもしれない。隆之介はこの状況を少し新鮮に、そして同時に、奇妙に感じる。

(周りからは、どう見えるだろう)

もしここにいるお客にアンケートを取ったら、兄妹より、恋人に見えるという答えが多いんじゃないかという気がした。黒髪で、涼やかな顔立ちの紫野と、色素が薄く、やわらかい雰囲気、隆之介はあまり似ていなかった。当然だ。兄妹といえど、血のつながりはないのだから。いや、法律上のつながりすらない。本当は、ここにもうひとりいるはずだった。紫野と隆之介をつなぐ女性が、7年前、忽然と姿を消したあの人が。

「でもお兄さんとうちやうって食事してるなんて、不思議な気分。初対面のときは、あんなにぎこちなかったのにな」

ふいに紫野が言った。思わずギクリとする。ふたりして、同じことを考えていたのか。紫野が目を細めながら、窓の外を見やる。つられて隆之介も外を見た。春の宵にふさわしく、少し湿ったなまぬるい風が、夜の街をゆらしている。ビーグル犬を散歩させる中年女性や、紫野と同じ年くらいの大学生のグループが、目の前の道を行きかっていた。

そのとき、ゆるいパーマをかけた小柄な女性を通り過ぎた。似た姿を知っている気がして、一瞬隆之介の動きが止まる。まさか、彼女のわけがない。同じような背格好の女性を見るたび、心臓がトビウオのように跳ね、すぐるような目で追い、そして自嘲気味に落胆する。7年間、ずっとこれを繰り返してきた。結果はわかつているのに、それでも彼の目は、彼女を探すのを止められない。隆之介の一連の動きを見て、目の前の紫野が口元きゅっと結んだことも、気付かないほどに。

さざめく店内の音が、急速に小さくなっていく。当時の記憶に吸い込まれる。セーラー服姿の紫野。駆け出し社会人だった隆之介。紫野がかつて住んでいた下町の、アパートの近くにあるファミリールレストランで、彼らは向かい合っていた。中学生の割に物静かで大人っぽい紫野は、警戒するような目つきでこちらを見ていた。隆之介はというと、8つも年下の女の子と何をしゃべっていいのかかわからず、マンガやヒット曲の話、むりやりねじり出そうとして、暖房が効いていたにも関わらず、背中に汗をかいていた。そして、切羽詰まった彼は思わず、こっぴど叫んだのだ。

「お姉さんを、僕にください！」

いつそう怪訝な顔をする紫野の横で、何それ、新しすぎる、と大笑いしたのが三崎遼子だった。23歳で、昼間は工場の事務員で、夜は場末のホステスで、紫野の唯一の肉親で、隆之介の婚約者だった。

その遼子が入籍直前に失踪してから、今日でちょうど7年だった。

第2話

それは、絵に描いたようなラブストーリーだった。年の離れた妹を養う勤労ホステスが、人の好い御曹司に見初められ、瞬く間に求婚される。女はホステス仲間たちに玉の輿ともてはやされたが、男は親戚中から大反対を受けた。そりゃ当然だろうと、さんざん疎まれた側の紫野ですら思う。彼らにしてみれば、私たちはどこの馬の骨とも知れない、ちっぽけで薄汚い姉妹だった。

遼子と紫野の両親は、紫野が生まれてすぐ離婚した。娘たちを引き取った母親も、何年後かに、借金を抱えたまま病に倒れ、あっさり死んだ。頼れる親戚も知り合いもいなくなったから、生きていくには、遼子が高校を辞めて働くしかなかった。ウェイトレス、クリーニング店、掃除、ビラ配り、引越手伝い……あらゆる仕事を経て、今は工場の事務員と場末のクラブのホステスをかけもって、どうにか生活を成り立たせている。といっても給料のほとんどは、紫野の学費や、借金返済に消えていた。ごくたまに客が買ってくれるブランド品　といつても、パチンコの景品レベルのものだが、もすぐに質屋に持って行き、遼子自身はきらびやかな装飾品など、何一つ持っていないかった。住んでいるのは、築30年の狭い木造アパート。夏は暑く、冬は寒い部屋で、姉妹は文字通り、肩を寄せ合いながら生きていた。実際のところ、その姿はまさしく「貧乏」だった。

こんな環境でよくグレなかったね、と遼子が紫野に茶化したことがある。そのとき素直には言えなかったが、心のなかではひとえに姉のおかげだと、紫野は思っていた。昼も夜も身を粉にして働いているというのに、遼子は疲れた顔を見せたがらない。小柄で可愛らしい容姿のくせに、とにかくよく働いた。妹に心配されるのを嫌がり、「だいじょうぶ」が口癖だった。立ち止まったら死ぬ、と思い

込んでいる節さえあった。そんな姉を見ていれば、グレるなんてつまらないことをするわけがない。夜中に帰ってくる遼子のために、紫野は狭い台所に立ち、每晚料理を作り置きした。明るい姉に似ず、小さな頃から感情を表現するのが苦手だったが、そうすることで、言葉にはできない何かを、共有できている気がしていたのだ。

隆之介が姉妹の生い立ちを聞いたとき、ジャズが流れる小洒落たバーだったというのに、気にも留めずにおいおいと泣いたという。逃げ腰になる男、薄っぺらい同情をよこしてくる男、下世話な想像を働かせる男たちは山ほどいたが、そんなふう泣いたのは彼がはじめてだった。もつとも、遼子が勤めるクラブに社会勉強と称して連れてこられたときから、隆之介は変わっていた。細い体にフィットした、皺ひとつないスーツ。さりげなく揃えられたブランド小物。店内を興味深そうに見回す、まぶしそうな瞳。どんなときも微笑みを絶やさない口元。年増のホステスが冗談半分で迫っても、焦ってはいたが、けして相手を傷つけたり、場の空気を壊すようなことは言わない。人の好きそうな、少し困った笑顔が印象的だった。育ちがいい、その一言に尽きる。香田製薬の三男坊だと聞いて、赤茶けたソファに座って接客していた遼子は納得した。なるほど、生きる世界の違う人だ。

その隆之介に妙に気に入られ、しぶしぶ出かけたデートで、断るつもりで赤裸々な貧乏話をしたはずだった。それが、上記のような反応をされたものだから、番狂わせにもほどがある。ぎよつとしている遼子の手を取り、隆之介はハンカチで涙をふきながら訴えた。「同い年のあなたが、そんなにも苦労しながら、しっかりと生きていくというのに、僕は自分が恥ずかしい。これからは、僕に守らせてほしい。心配しないで、妹さんのことも、僕が責任もって面倒みます」

花束を抱えて帰ってきた姉の口から顛末を聞かされたとき、紫野は思わすのけぞりながら言ったものだ。

「お姉ちゃん、その人大丈夫？」

変わってるわよねえ、気の迷いよねえ、と姉妹は笑い、ちゃぶ台でバナラアイスを食べた。タイムセールで77円のアイスクリームが、日常のささやかな楽しみだった。隆之介にもらった花束は大きすぎて、100円シヨップの一輪さしには到底入らなかったから、紫野がビニールを外して、風呂場のバケツに入れておいた。

だから、結婚しようと思う、と遼子に告げられたとき、紫野は隆之介の存在などすっかり忘れていたので、本当に驚いた。驚きすぎて、なめていた飴が口の中からこぼれ落ちた。中学校で進路面談を受けた帰り、秋の道を並んで歩いているときのことだった。実は隆之介とは、あれから何度か会い、そのたびに真剣なアプローチを受けていたのだという。確かにお坊ちゃんで、常識がないところもあるけど、真面目でピュアな人だから、きっと紫野ともうまくやれると思うの。入籍は、早ければ来年の春になる。新居も、素敵なんだろうになりそう。まるでハミングするように、ごくなんでも楽しいことのように、彼女は話した。

でも、あまりにも急すぎるじゃないか。紫野が反論しようとして口を開きかけた瞬間、察したかのように、遼子が紫野のほうを向いて、だいじょうぶだいじょうぶ、と笑った。うしろに暮れかけの太陽があつて、金色の光が包み込むように輝いていた。

その笑顔を見たら、紫野はもう何も言えなくなってしまった。

第3話

予想していたことではあったが、隆之介の結婚は、とにかく猛反対された。その勢いといったら、台風と地震と津波がいつぺんにやって来たようだった。もっとも、隆之介の家族にとっては、彼の突然の結婚宣言はそれ以上の衝撃だった。

母は泣き、だまされっていると叫んだ。父は興信所を使って、三崎姉妹がいかに貧しく、身寄りがなく、香田家と釣り合わないかを語った。すでに結婚していた年の離れたふたりの兄は、「若いときにそういう気持ちになるのはわからんでもないけど、焦ってもいいことなんかないぜ」と諭した。それでも、隆之介の決意は固かった。

製薬会社の御曹司だというのに、生まれつき身体が弱かった。母やお手伝いさんが身の回りのことをなんでもやってくれるものだから、自分で選ぶということを身につけないまま育ってしまった。大きくなる頃には健康になっていたが、その習慣はすっかり身に沁みていた。人に勧められればNOとは言えず、これといってこだわりもない。小学校から大学までエスカレーター式の私立一貫校。さらには一族の経営する会社に就職するところまで、道は完璧に整えられていた。

「この生き方でいいのだろうか」という不安や疑問が、皆無だったわけではない。ときどきそれは頭をもたげ、隆之介の喉の奥をぶすぶすと焦がすこともあった。ただそう思ったとしても、じゃあ具体的にどうしたいということが、今ひとつピンとこなかった。若い人間にありがちな感情だと、なんとなく自分を納得させていた。

そんなとき遼子に出会って、突然何もかもわかってしまった。自分がすべきこと、守るべき人、まっとうすべき人生が。遼子以前に付き合った彼女も何人かいたが、まるきり違っていた。それはまるで、見えない手で、瞼をこじあけられたような衝撃だった。

あんまりにも隆之介が強情なので、ついに家族たちが折れた。「もう、好きにしなさい」と母が肩を落としたとき、神妙な顔で聞いてはいたが、内心は、溢れてくる笑みを押しとどめるのでせいっぱいだつた。新居は、実家から少し離れたところにある白い一軒家に決めた。土地ごと香田家の持ち物で、ずっと人に貸していたのだが、ちょうど最近空きになっていた。母の最後の希望でもある。身近な場所に住まわせることで、せめて安心したかったのだらう。家賃もいらぬといふので、お言葉に甘えることにした。それを聞いた遼子はちよつと複雑な表情をしたが、「これからいろいろお金がかかるから」と言つと、わかつた、と頷いた。

遼子と話し合つて家具を注文したり、結婚式場の下見に行くのは、隆之介にとつて本当に楽しい日々だつた。仕事のモチベーションもあがつた。遼子のクラブに連れて行つてくれた先輩が「この幸せ者！俺のおかげだろ？」と、背中をバシツと叩いてきたとき、飲みかけのコーヒースーツにこぼしたが、「スピーチはお願いしますよ」と、笑つて返す余裕すらあつた。

年が明けて、紫野が第一志望の高校に無事合格した。難関の都立高校である。遼子がまっさきに電話してきて、ほんとすごいでしょ、自慢の妹なの、とはしゃいだ。隆之介は、電話の向こうにいる彼女をほほえましく見つめる。遼子は結婚を決める前、こう言っていた。自分が中卒なのは気にならないが、紫野はすごく頭がいい。本人は定時制高校に行つて働くつもりみただけど、できることなら才能を活かしてやりたい……と。なんと美しい姉妹愛だらう。相変わらず会つたびに警戒され、目を細めるようにしてこちらを見てくる紫野のことは得意とは言えなかつたが、きつと何もかもうまくいくと、隆之介には感じられた。

まったくもつて、何もかもうまくいくはずだつた。その日まで、本気でそう信じていた。その日は朝から曇つていて、強い風が吹い

ていた。意地の悪い人格が取り憑いていて、なまぬるい息で、せつかくの桜の花びらをバラバラに散らしてしまう。そんな風が吹いていた。

オフィスビル1階の受付から、怪訝な声で電話がかかってきたのは、16時を回った頃だった。「ちよつとよくわからないんですが」と、受付嬢は切り出した。「中学生の女の子がひとり、ロビーでお待ちです。おそらく、香田さんのことだと思うのですが……」。

紫野は当時、携帯電話を持っていなかったし、隆之介の連絡先も知らなかった。もちろん会社の場所だつて知らないはずだった。あとで聞けば、紫野が結婚式で着るドレスを探しに、このあたりに買物に来ていたとき、あの高いビルが彼の会社だと、遼子に教えられたらしい。そのかすかなヒントをたよりに、ひとり電車を乗り継いで、紫野はこのビルまでたどり着いていた。とはいえ、部署名などもわからない。突然現れて、「香田隆之介さんいますか」としか言えない制服姿の少女に、受付嬢が驚いたのも無理はなかった。それでもなんとか取り次がれたのは、創業者一族の息子である隆之介の名前を、受付嬢が記憶していたからだ。

慌てて隆之介が上階から降りてきたとき、社員や客が多く行きかうロビーで、紫野は明らかに目立っていた。モダンなデザインのオフィスにそぐわない、やぼったい黒いセーラー服の、おかつぱの女子中学生。皆がチラチラと彼女を見ていく。しかし紫野は、そんな視線などないもののように、微動だにせず、ただじっと座っていた。ぴんと張り詰めた横顔は、近づくの躊躇させるほど、静けさをまとうていた。

ふと紫野が立ちあがり、ゆっくりとこちらを振り向いた。何故そんなふうに思ってしまったのだろう、隆之介自身にも理由はよくわからなかったが。その瞬間の紫野は、まるで、冥府からの使者のようだった。ただでさえ白い肌が、青ざめるように透き通ってい

た。隆之介は直感的に、ああ、良くないことが起きた、と悟った。

小さく会釈した少女は、無表情のまま告げた。

「姉が、いなくなりました」

第4話

「ね、来たよ、鴨のコンフィ。はやく食べないとなくなっちゃうよ」
紫野の声がして、隆之介はハツと我に返る。状況を理解するのに、数秒かかった。ここは……現在だ。ここにいる紫野はもうおかつぱではなく、髪を伸ばして、すっかり大人っぽくなっていた。いたずらそうな笑みを浮かべ、フォークをわざと隆之介の目の前でブラブラしてみせる。

白い大皿に、鴨のもも肉がどんと鎮座していた。横にはマッシュしたポテト。皿を横断するように、ソースが芸術的にかかっている。こんがり焼けた皮の匂いが、香ばしく鼻をついた。途端に、感覚が冴えてくる。隆之介は一度頭を振った。

「ごめん、ボーっとしてた」
「いえいえ、いつものことですから。お兄さんの天然にはもう慣れてます」

紫野が笑いながら、鴨を切り分けてくれる。なかなかのポリウムだ。隆之介はたちまち腹が減ってきた。我ながらおめでたいやつだ。

口をもぐもぐさせながら、そう言えば、と紫野が言った。

「一番はじめの頃、鶏肉買ってきてくださいって頼んだら、お兄さんさ、鴨を買ってきたことあったでしょう」

「ああ、そんなこともあった気がする」
「絶対あった。私、お金持ちの人はいつもこんな食ってるの？つて、すっごく驚いたんだから。結局、週末に来たお手伝いさんに、ちゃんと焼いてもらったんだっただけかな」

隆之介の頭に、慥然とした表情の幼い紫野が浮かんだ。そのときは、彼女が一体何が気に入らなかったのか、わからなくておろおろしたが、今考えれば本当に世間知らずだった。かつてのことを思い

返すたびに、隆之介は頭を掻きむしりたくなる。

「ほかにもバカ高いフルーツトマトとか、南国の珍しい果物とか、よく買ってきてたよね」

「恥ずかしいからこれ以上言わないで、ホント」

「でも、言えばちゃんと直してくれたから、そういうところは素直で助かりました」

「……その発言、妹とは思えないなあ」

隆之介が苦笑する。

実際、その頃の兄と妹の関係は、どちらが上で、どちらが下か、怪しいものだった。新生活に対する憧れだけは豊富にあったが、生活能力が追いついていない隆之介に対し、すでに長い家事のキャリアを持つ紫野は、しっかり地に足つけていた。彼女はいつも淡々と家事をこなした。ある日、台所で野菜を刻む紫野のうしろを、「何かすることある?」「足りないものとかない?」とちよろちよろしていたら、だしぬけに紫野が振り返った。右手に包丁、左手に大根を握りしめ、水玉ピンクのエプロン姿で、思いきり仁王立ちしていた。思わず隆之介は、後ずさりした。

「できないことを無理にしようとしなくていいですから」

つとめて冷静に、紫野が言った。

「お義兄さんは、『適正価格』って言葉を覚えてください。要らないものは、要りません!」

その威容は、ちよつと忘れられそうにない。

紫野は媚びない少女だった。何も持っていないなくても、ねだったり、おもねったりするような、下卑た性質は持ち合わせていなかった。情緒不安定になって、泣いたり甘えたりすることもなかった。大人たちに対して、常に等しく冷静に接した。その等しさのせいで、「可愛げがない」という疎まれることも少くない。だが、それがなにかと言うかのように、さりげなく振る舞った。わずか15歳だと

いうのに、すでに人生の理を知ってしまったような、どこか醒めた視線の持ち主だった。

遼子に関しては、手がかりも痕跡もほとんどないまま、ただ日々だけが過ぎていった。アパートに特に変わった形跡はなく、普段通りに出かけるようにして、そのまま消えてしまったのだ。探せるところを探しつくしたが、手紙の一枚も出てこなかった。事件か、事故か、それとも。

やつれきった隆之介が、未練がましく紫野を見たときでさえ、彼女は顔色を変えなかった。「紫野ちゃん、心当たりはない？」。それは既に何百回も繰り返された質問だった。紫野はじつと隆之介を見返す。底の深い黒い瞳は、隆之介の姿をとらえながら、同時に別の情景を見ているような印象を与えた。

「なにも、わかりません」

何百回も繰り返された答えだった。

それでも隆之介にとっては、紫野の存在が最後の光明だったと言える。想定しうる最悪の事態をすべて思い浮かべ、脳内で押しついたり引いたり激しい闘いを繰り返した結果、たどりついた答えは、やはり「遼子が帰ってくるのを信じて待つしかない」というものだった。それに、遼子が今どこで何をしているにしろ、あんなに妹思いだった彼女が、ひとりになった紫野を心配してはいないはずがない。「責任を持って面倒みる」と誓ったのだ。紫野を守って、再び無事に遼子に会わせることが、己の貞潔の体現だという気がした。

もちろん、下心がなかったわけではない。紫野を手元に置いておくことで、遼子とのつながりを絶たずにいられる。空白の席を待ち続ける口実ができる。

「紫野ちゃん、準備できた？ 車を待たせているから、荷物を持つ

たら行こう」

3月最後の日は、よく晴れていた。下町に似合わない高級車が、アパートの前に停まっている。隆之介が紫野を迎えに来ていた。

この家に来るのは3度目だが、何度来ても驚くほど狭く、あらゆるところが傷んでいる。さつきも外階段の裏にネズミの死体をみつめて、隆之介は「ヒッ」と情けない声を出してしまった。若い娘ふたりが暮らすには、なにもかも剥き出されすぎている環境だと思っただが、ここも今日で明け渡すことになる。身の回りのものだけ紫野に持たせて、あとの処分は業者に頼む手筈だった。

玄関から出てきた紫野の荷物は、驚くほど少なかった。背負ったリュックと、手提げ袋ふたつ。以上が、三崎紫野という女の子の構成物だった。

隆之介が先導して、外階段を降りていく。彼が先に地面にたどり着いたとき、上から「あ」と、めずらしく紫野の驚いた声が降ってきた。

「冷凍庫に……」紫野が口の中でつぶやく。「アイスがまだ」

なんで、アイス？ そう思いつつ、「取りに戻ろうか？」と隆之介は紫野を見上げた。

逆光だった。一瞬、紫野の顔が笑ったように見えた。

「いいんです。一緒に処分してもらいます」

いつもより跳ねた声でそう答えると、紫野は猫のように身軽に、階段のステップを降りてきた。思わず、転ばないように、隆之介がさっと手を出す。彼にとっては習慣、男のたしなみのつもりだったが、紫野が瞬間、身構えた。

（このくらいの子は、こういうの嫌がるんだっけ）

しかし出してしまった手を引っ込めるタイミングも難しく、「えー」と、隆之介がもごもごしていたら、紫野がさっと手を握り、さつきと車のほうへ歩き始めた。

意外なほど強い力だった。

隆之介は反射的に紫野を見たが、彼女は下を向いたまま、ずんずんと歩き続ける。隆之介も大股で追った。

紫野は一度も振り返らなかった。ふたりを乗せた車は静かに、南の方向へと滑り出した。

第5話

「他人の世話になっ**て**いるのに、泣くのは、おこがましい気がする」

私がそう言ったとき、義兄はどう思っただろう。小さく目を見開いて、それから、照れたような、困ったような、いつもの笑顔を浮かべた。笑っているのに、さみしそうだった。それとも私は同情されただろうか。強情な娘だと、憐れまれたのだろうか。

「ああ、だいぶ酔った……」

隆之介は力尽きたようにテーブルに両腕を置き、かくつと頭を落とした。先ほどの鴨のコンフィはもちろんのこと、最後に出てきたオマール海老とクリームチーズのパイ包み焼きまですっかり平らげてしまうと、さすがに食べ疲れてぐったりした。

「フランス料理って、まさに肉食！って感じよね。ワイン以外の飲み物じゃ、なかなかつり合いが取れなくて、ついつい飲みすぎちゃう……。あ、お水ふたつください」

グラスに残っていた赤ワインを素早く飲みほし、紫野が手を上げて店員に合図する。隆之介は怠惰な動きで両腕のカフスポタンを外しながら、恨めしそうに紫野を見上げた。

「といっても紫野ちゃん、全然酔ってるように見えないよ。顔、真っ白ですけど」

「まあ、お兄さんよりはアルコール耐性あるかもね。はい、お水」
ぶつくさ言いつつも、隆之介は素直に水を受け取る。紫野はふふっと笑いながら、膝に敷いていたナフキンを取り上げ、口元を押さえた。隆之介が独り言のようにつぶやく。

「まったく、誰に似たんだか……」

それは、何も考えずに口から出た言葉のようだった。証拠に、彼は「あー、美味しい」と言いながら、水を飲むことに集中している。

紫野は動きを止め、その無邪気な横顔を眺めた。ナフキンに隠された口元が、知らないうちにゆるんでいた。

「突然変異かもね」

「え、なに？」

「ううん、なんでもない。会計してくるから、お兄さんは水飲んで待ってて」

時刻は22時半。予定より長居をしてしまった。紫野が財布を持って立ち上がる。慌てて追いかけてよとした隆之介を、紫野が制した。

「いいの、今日は私のおごりって決めてたから。たまにはいいでしょ、ね？」

じゃあ次は僕が、という言葉が、背中から聞こえてきた。紫野はレジに向かいながら、右手をあげてそれに応えた。

このあたりは閑静な住宅街だが、今の時期は桜が見ごろになるだけに、夜道はまだまだにぎわっていた。特に駅から丘の上へとあがっていく道には、等間隔に桜が植えられ、いい名所となっている。ふたりの住む白い家も、その途中を入ったところにあつた。

駅から家まで少し距離がある。普段ならバスかタクシーを使って帰るところだが、「酔い覚ましに歩いて帰ろう」と提案したのは紫野だった。春の夜の天候は気まぐれだが、今夜は過ごしやすく、風の勢いもちょうどいい。頬をなでていく風が、酔った身体には気持ちよかつた。ゆるやかな坂道を、ふたりは並んで歩き始めた。

* * * * *

家の前に車の停まる音がして、紫野は読みかけの本から目を離し、ダイニングの壁にかかっている時計を見上げた。深夜1時を回ったところだった。思っていたよりも隆之介の帰りが早い。今夜は友人の結婚式に出席して、そのまま仲間うちで飲むから、帰りは朝にな

ると言っていたのに。

土曜の夜だった。紫野は図書室で借りた分厚い本を読破しようと、夜更かしを試みていた。やっと最終章まで読み進めて、いよいよクライマックスを迎えようとしている。不本意なところで中断せざるを得なかったことに、紫野は少なからず失望した。

自分の部屋として与えられたのは、2階右奥の8畳の部屋。カーテンから机から棚から、すべて引越しのときに新調されたものだ。普通の15歳の女の子にとっては、新しい部屋というのは、それ自体が格好の娯楽に違いない。ポスターを貼ったり、雑貨を飾ったり、友だちと長電話したり。しかし半年暮らしてみても、紫野は、自分の部屋というものに慣れなかった。部屋を使いこなせない、という言い方が正しいか。姉と暮らしたアパートには和室が二部屋あるだけで、勉強も食事も肘をつけてテレビを見るのも、いつもちゃぶ台だった。奥の部屋では姉と布団を並べて寝た。こんなに正確に明確に区切られたスペースを、自分で支配することができなかった。まるで舞台装置の上に、エキストラとして存在しているような錯覚を覚える。

それでも普段なら、夜は用がない限り部屋にいる。理由は簡単で、隆之介となるべく顔を合わせないためだ。義兄がなんとか話題を探そうとして、毎回いらぬ苦心をさせるのも面倒だったし、あまり何も考えずにいたかった。静かに日々をやり過ごしたかった。

だから、学校から帰ってきて夕食の準備をするまでの時間や、今日のように隆之介が確実に家を空けているときだけ、何も気にせずダイニングにいられる。もちろん、そこにあるのは折りたたみのちゃぶ台ではなく、立派なウォールナットの6人掛けテーブルだが、自分の部屋に追い込まれたような気分であるよりは、数倍の開放感があった。

玄関に人の気配がして、紫野は耳に意識を集中させた。やや間がある。どうやら、隆之介は鍵を探していたらしかった。ガチャガチ

ヤという音がする。特段大きな音ではないはずなのに、寝静まった住宅街に響いた気がして、紫野はなぜか決まりの悪さを覚えた。

「ただいまあゝ」

義兄が呑気な声を発しながら、廊下を歩いてくる。バンと扉が開き、隆之介と目が合った。

普段ならここで隆之介が一瞬背筋を伸ばすのだが、今日は違った。「あれえ、紫野ちゃんまだ起きてたの?」。いつも以上にニコニコしてダイニングを横切りながら「これ、おみやげ。お菓子食べていいよ」と、テーブルの上に白い紙袋をどんと置いた。そのまま真っすぐにソファへと向かい、片腕で上着を脱いだかと思うと、それを丸めてまくら代わりにし、ごろんと横になってしまった。ソファの背に隠れて、隆之介が見えなくなる。

あつという間の展開に、紫野は立ち上がるタイミングを失い、最初から最後まで座ったまま、ぼかんとしていた。思い出したように「あの」と、遠慮がちに、ソファの向こう側にいる人に呼び掛けるみる。

「ジャケット、皺になると思いますけど」

ふあゝと、あけっぴろげな欠伸が聞こえた。

「いーのいーの。今もうれつにきもちいいんで、またにして……」
意味不明なつぶやきを最後に、物音が途絶えた。

こんなに酔っている隆之介ははじめて見た。未成年の紫野に気を使っているのか、家で飲むときはいつも缶ビール1本程度だったし、飲み会があつたとしても、手洗いうがいをするくらいの余裕はなさなない人なのに。

テーブルに置かれた紙袋に目をやる。中には、白地に金の模様がプリントされた包装紙に包まれた箱がいくつかと、日本酒の小瓶と、メニューのようなものと、可愛くラッピングされたフィナンシェが入っていた。これが引き出物というやつらしい。

音をたてないように立ち上がって、もう一度ソファのほうを見る。紫野の場所からは、だらしくはみ出した右足が見えた。その足が、一定のリズムで小さく揺れている。なんだろうと思ったら、同じリズムで、いつの間にか寝息が聞こえていた。

それが寝息だと気付いた瞬間、紫野は身体の芯から手足の先へ、言いようのない感情が噴出するのを感じた。おののきと安堵。相反するふたつの感覚が、猛スピードで心体を襲った。思わずテーブルに手をつく。深呼吸せずにはいられなかった。

自分以外の誰かの寝息。

本当に久しぶりに聞いた気がした。身近なものであったはずなのに、今この瞬間まで、ずっと忘れていた気がした。

たったそれだけのことで、なぜ……。

こんなにも動揺してしまうのだろうか。

第6話

しばらくそうしていただろうか、ふと身体が楽になって、視界が開ける。目の前にあった麦茶のグラスに気付き、手に取る。ゴクゴクゴクと一息に飲んだ。透明な茶色の液体が、喉や食道を通るのが見える気がした。ひんやりした感触に、脳が潤う。

部屋に戻ろう。戻らなくては。紫野は手早く本を片付け、グラスを台所の流しに置いた。そろそろと、ダイニングから脱出する。静かに開けたはずなのに、扉がギイと音を立てた。階段を昇りながら、いまだ履きなれないスリッパが、パタン、パタンと空気を押しつぶしていく。

部屋のドアを開けたら、窓を開けっ放しにしていたらしく、風が吹き込んできた。昼は穏やかな日差しだったが、夜風は意外と冷たい。部屋はすっかり冷え切っていた。10月も下旬。これから、どんどん寒くなる。

紫野は小さく舌打ちして、がばっとクローゼットを開けた。下段に収納してあった薄手のブランケットを手に取ると、担ぐようにして部屋を出た。もう一度階下に向かう。面倒くさいので、スリッパは部屋の前で置き去りにしていった。

相変わらず隆之介はソファの上で、健康的な寝息を立てながら眠っていた。紫野は息をひそめながら、そろり、そろりとソファの表側に回り込んだ。

ソファに投げ出された、隆之介の身体。義兄をこんなにじっくり見るのははじめて会ったとき以来かもしれない。人の好きそうなやわらかい頬は、酔ったせいかいつもより赤みを増している。口角の上があった薄いくちびる。上品なパールグリーンのネクタイと、胸元に差された同系色のチーフ。その胸が、寝息に合わせて小さく上下している。何か、しあわせな夢を見ているのだろうか。赤子のよう

に顔に手を添えている姿は、24歳という年齢よりも幼く見えた。ただ、最初に会ったときよりも少し痩せた気がした。よく見れば目元にもほんのかすかに、皺がよったような感じもする。

隆之介にかけようと、紫野はブランケットの端と端を持ち、腕を上げてはためかせた。

そのときだった。隆之介が目を開いたのだ。

紫野の動きが止まる。見上げた隆之介と目が合った。

雷に打たれたように、隆之介が上半身を起こす。紫野が言い訳しようとして口を開くよりはやく、乾いた声で、隆之介がうわごとのように叫んだ。

「りよ……っ」

だが、その名前は最後まで呼ばれることなく、夜の空気に消えていく。視線をつなげたままの隆之介の瞳に、みるみるうちに失望が広がっていくのが、紫野にははっきりと見て取れた。それはどんな言葉よりも雄弁だった。紫野はブランケットを広げたまま、何も言えずに突っ立っていた。この状況にとるべき言動が何一つ浮かんでこない。遠くで時計の針が鳴らす音だけが、左耳から入って、右耳から出ていった。その間も、ブランケット1枚を隔てて、兄と妹はみつめあっていた。

「ごめんなさい、と言いかけたそのとき、唐突に隆之介の目から涙があふれ出た。最初の一滴がまっすぐ細長い筋を描いて顎まで到達すると、そこからはもう止まらなかった。あつという間に涙腺が決壊して、次から次から涙があふれてくる。雨乞い後に神が降らせた僥倖かのように、その光景はどこか芸術的でした。」

「じゅ、ごめ……」

自分でも信じられないといった表情をして、隆之介は頬を濡らし続ける。そのうち顔がゆがみ始め、ずっ、と鼻をすすったかと思うと、「ごめん、ごめん、ごめん」と繰り返しながら、手のひらを顔に当てて崩れ落ちた。

ああ、可哀想なひと。

こんな若い身で、結婚直前の婚約者を失って、関係ない妹を引き取って。何ひとつ進展しないなかで、ニコニコと他人の結婚式に出席して、さらには自分の家なのに、泣くことすら遠慮しなくてはならないなんて。

思わず紫野はブランケットを頭の高さに引き上げて、向こう側の隆之介に呼びかけた。

「見てません」

バカみたいだ。自分でも思う。でも、そうせずにはいられなかった。

「見てませんから」

隆之介の嗚咽が一回り大きくなった。大の男が発する濁音の洪水を、紫野はその姿勢のまま耐え続けた。

「はー」隆之介がため息をつく。「もう大丈夫です、すみません」ソファに浅く腰かけ、隆之介が頭を垂れていた。ローテーブルの上には、空になったティッシュの箱が転がっている。

紫野はソファの端にちょこんと腰かけていた。さっきまでの緊張感が解けて空気がゆるみ始めると、途端に居心地が悪くなってきた。顔を合わせないように、意味もなく自分の足の爪先を眺める。

「本当に面目ない。ごめんね」

「別に謝ることじゃないです。私こそ起こしてしまつてすみません」

「今日は飲みすぎました。申し訳ない。以後気をつけます」

「私は別に……。じゃあ、部屋に戻ります」

言い逃げするようにして立ちあがると、紫野はダイニングを出ようと歩き始めた。その後ろ姿を、隆之介が立ちあがって呼びとめる。

「ありがとう」

紫野はなぜだか、振り返りたくなかった。横顔だけ、隆之介のほうに傾ける。

「紫野ちゃんは泣かなくてえらいのに、こんな頼りない兄でごめんね」

「そういふんじゃないよ」

思わず隆之介の言葉を打ち消して、紫野は強い口調で言った。

「他人の世話になっひとているのに、泣くのは、おこがましい気がするんです」

それを聞いた隆之介は小さく目を見開いて、それから、照れたように、困ったような、いつもの笑顔を浮かべた。

「おやすみなさい」

「……おやすみ」

紫野が静かに部屋を出ていった。しばらくして隆之介も、電気を消して続く。ブランケットが残されたまま、部屋はようやく秋の眠りを迎えようとしていた。

第7話

駅から丘の上へのびていくゆるやかな坂道を、紫野と隆之介は並んで歩いていた。進むにつれ、すれ違う人の数も少なくなっていく。春の夜風が、坂の下から吹いてきて、ふたりに追いつき、追い越していく。隆之介のスーツの裾がはためき、パタパタと楽しげな音を立てる。

紫野がかつて暮らしていた下町は、家も店も人も、基本的にぎゅうぎゅうに詰まっていた。一方、このあたりは明治時代から続く古い高級住宅地で、街全体に独特の余裕と静けさがあった。大通りから一步入れば、昔の面影を残した街並みが姿を現す。そこかしこに小道や坂があつて、長く暮らしている隆之介でも、知らない場所に迷い込んだような印象を受けることがある。

石畳の階段の前を通り過ぎた。ここを上って少し行くと、小さな神社がある。祀られている神様は字問をつかさどるといい、地元ではちょっと有名なスポットだった。紫野のセンター試験当日、隆之介は出勤前に立ちよつて、お参りしたことがある。このことは、紫野には内緒にしてあつた。当時の紫野は見るからに気を張っていて、とてもじゃないが、こちらから受験に関する話などできなかつたのだ。

「やつぱり、反抗期ですかね……」

右手に豚トロの串、左手に柚子梅酒のソーダ割を持ったまま、隆之介が遠い目をしてつぶやいた。複合ビルの地下にあるチエーンの居酒屋は、外の寒さに反比例して、スーツ姿の男たちの熱気でにぎわっていた。

「香田、それ26の男が発する言葉じゃないぞ」

向かいの席に座っている別部署の同期が、呆れ気味に言う。その隣には、いつぞや隆之介を遼子のクラブに連れて行った、件の先輩。

ねぎまを串から引き抜きながら、うんうんうなずいている。

「だって、最近本当にしゃべってくれないんですよ！ ようやくちよつとは懐いてくれたかなと思ってたのに、食事以外はずーっと部屋で勉強してるし、休みの日も図書館で勉強してるし、顔を合わせてもなんかこつ、ピリピリしてて」

再び隆之介が嘆いた。分厚い参考書をどっさり抱え、そそくさと部屋に戻る紫野が思い浮かぶ。以前はダイニングで宿題したり読書したりすることもあったのに、最近は丸一日顔を合わせないこともザラだ。

「でもよー、その子、高3だろ？ 年が明けたらすぐセンター試験じゃん。真面目に勉強してることに、むしろ安心すべきじゃね？」

食べ終わった串で、先輩が隆之介のほうを指してきた。同期も「俺もそう思っつす」と同調する。隆之介は小首をかしげ、「大学受験って、そこまでするものですか……」とつぶやいた。

それがいけなかった。地方から関東の大学に進学した同期と、1浪・1留を経験している先輩から、ブーイングの集中砲火を受ける。「うわっ、これだから内部進学組ってムカつくわ！ 俺だって当時は必死こいて勉強してたよ。母親が『必勝』って書いたハチマキとか買ってきてさあ、肉体的にも精神的にも追い詰められてたっついでに」

「反抗期以前の問題だな。お前と違って、その子は普通に公立に通ってるんだろ？ 俺が妹だったらぶん殴りたくなると思っぜ？」

「す、すみません……」

自分では気をつけているつもりなのだが、ときどき他人から見たら“抜けている”発言をしてしまうらしい。

「じゃあ、僕には見守るしかできないんですかね」

「そういうことだ。受験は自分との闘いだ」

「ネガティブなことは言うなよ。安心させるのが家族の役割だ。母親にプレッシャーかけられまくった俺が言っただから、間違いない」

同期はこの話を始めるといつも長くなる。改めて、受験とはすこ

いものなのだなあと、やはり他人事のように隆之介は思った。

「それにしても」

先輩が急に真面目な顔つきになる。

「俺もちよつと、責任感じたりしたもんだけどさ。正直、こんな生活長く続くとは思わなかつたよ？ 血の繋がってない女子高生を引き取って面倒みるなんてさあ、いくらお前がぼっちゃんだからって、そう簡単なことじゃないだろ」

社内でも、隆之介と紫野のことはすっかり知れ渡っていた。当初はいろんな人に同情されたり、質問攻めにされたりしたものだ。あまり面識のない上司に、いきなり「困ったことがあったらいつでも言え」と肩を叩かれたこともある。もちろん好意的な人たちばかりではなく、陰口やあらぬ噂を立てられたこともあったらしい。同じ会社の専務でもある父は息子の状況に頭を抱えていたようだが、3年も経ってしまったら、もはや大して話題にも上らなくなっていた。と、隆之介は思っていたのだが……。

「まあ、学費は僕の貯金から出したりしてますけど、二人暮らしないで、それほど大変でもないですよ。家事は妹が率先してやってくれますし、助かっているくらいです」

「だから、そういうことじゃなくてなあ」

「いいんすよ先輩、こいつのことはほつときましよう」

わかつてない、という顔をする先輩を、同期がフォローする。心配されているのが伝わって、隆之介は少し照れた。

「確かに、自分でも何やってるんだろう？ って急に不安になったりもするんですけど」

隆之介は手元のグラスを眺めた。底で生まれた泡が、切れ目なく立ちあがってくる。

「でもふとした瞬間に、ずっと昔から一緒に暮らしてたように感じることがあるんですよ。不思議ですよ。妹にとってはいい迷惑かもしれないけど、僕個人は、ちよつと感慨深くなったりするんですよ」
向かいの席のふたりが顔を見合わせた。先輩が力なく言った。

「お前つて、なんつーか、やっぱりいいヤツだよな……」

先輩たちの言うとおり、受験が無事終わると、それまでが嘘のように紫野はリラックスした。正直なところ、受験の前と後では、少し性格まで変わったんじゃないかと思えるほどだった。彼女が合格したのは難関の国立大学で、隆之介の父親の出身校だった。それを父に告げたとき、なんと向こうからこちらの家に向いて、祝い金をくれたことがある。「うちの息子3人は私立にやってラクさせてしまったから、君が後輩になってくれて嬉しい」とまで言ったのだ。かつてあれだけ紫野のことを反対していたくせに現金なものだと隆之介は思ったが、兄としての自分も認められたような気がして、少し誇らしかった。このときは紫野も、遠慮しながらも笑顔をつくった。

大学に入ってから、ますます紫野は変わった。表面的には相変わらず冷静だし、一定の距離を保っていたが、以前の緊張感のようなものが徐々に消えていったのだ。ちよつとした冗談も言いあえるようになった。大学生というある程度自由がきく立場になったことが、彼女をラクにしているように見えた。それは隆之介にとっても、単純に喜ばしかった。

そしていつの間にか、遼子について話すことが、お互いなくなっていた。

第8話

桜がはらはらと散っていた。空にはぼんやりとかすんだ月が出ていて、歩き続ける兄妹を淡く照らしている。家から最も近いコンビニを通り過ぎてしまうと、街灯以外には脇の住宅の灯りがわずかに漏れる程度で、坂道はいつそう静かだった。生きているものは自分たちふたりだけのようだ。紫野がそんな奇妙な錯覚にとらわれていると、隆之介の意外すぎる一言が、彼女を現実に引き戻した。

「そういえば、背の高い男の子とはどうなったの？ あれ、彼氏？」
「はあ!？」

思わず素っ頓狂な声が出て、足を止めた。隆之介が腕組みをして、してやったりという顔で紫野を眺めている。いったいこの男は何を言い出すのだろうか。

「見ちゃったんだよね……。夏に新宿で。伊勢丹の裏あたりを、ふたりで並んで歩いていたでしょう。それから映画館に入らなかった？」

「うそ、見てたなら、声かけてくださいよ!」

「デート中の妹を邪魔するなんて、無粋でしょう」

「デートっていうか……」

紫野が口ごもって、少し怒ったような、困ったような表情を見せた。普段冷静沈着な彼女の、こんな姿は珍しい。隆之介がさらに続ける。

「割とイケメンだったよね。結構、お似合いだと思っただけど」

「だから、そういうんじゃないですから」

紫野がぶいと横を向き、隆之介を置いて歩き始める。隆之介は苦笑しながら後を追った。

お兄さんだって、とは言えなかった。紫野は知っている。2年前の秋から冬にかけて、隆之介が妙にいそいそとしていた時期があっ

た。結果から言えば、大したことにならなかったようだが、その相手とは何度かデートくらいしただろう。いつも愛用している柔軟剤の、清潔でやわらかい香りを漂わせている兄から、そのときだけは湿った、色恋の匂いがした。

ある日紫野がダイニングに入ると、隆之介が窓のほうを向いて、携帯電話でなにやら喋っている。女の声が聞こえるなと紫野が思ったとき、振り返った隆之介が紫野の存在に気付いた。そのときの表情といったら、母親に悪さがバレた子どもようだった。慌てた様子で電話を切ると、「紫野ちゃん、足音がしないからびっくりした」と無理して笑ってみせたものだ。首筋にじつとりと汗をかいている。

「……会社の人ですか？」

「うん、まあ、そんなところ」

その言葉は間違いではなかった。それからしばらくした土曜の午後、「忘年会の打ち合わせをする」と、隆之介の会社の同僚がやって来たことがある。ちょうど出かけるところだった紫野は、玄関前で挨拶しただけだったが、その中のひとりの女性に妙に見られた気がした。他の人たちは「これが噂の紫野ちゃんね」「おー、美人じゃん、香田」と、好奇心や、無邪気なからかいの目で紫野を見ていたが、彼女だけは別だった。ファー付きの白いコートに茶色いブーツを合わせ、いかにもOLといった可愛らしい外見の、小柄な女性。口こそ笑みの形に開いていたが、そんな戯れはいかにもつまらないと言わんばかりに、目はじつと据わっていた。そのくせ、紫野の全身を上から下まで一瞬で見回し、目に焼きつけようとしているようだった。視線の正体を一言で表すなら、それは敵意だった。

なるほど、こいつか。

バス停に向かって坂をくだりながら、紫野は納得した。彼女にしてみれば、狙っている男にくっついていくワケありの妹など、目ざわり以外のなんでもないだろう。紫野が隆之介のしあわせを阻む足かせ、くらいに思っているかもしれない。今日の集まりも、彼女が隆之介の家に行くことをさりげなく提案したのではないかと、紫野

は思った。恋に夢中な女は、そういうことをしたりする。結局、嫌な思いをするのは自分なのに。

不思議なことにシヨックや焦りは湧いてこなかった。いつかこんなことも起こるだろう。漠然と予想してきたことだ。紫野はむしろ、妙な安堵すら感じた。

若いんだもの、すぐ別のいい人を見つかる。遼子がいなくなったとき、外野はそんなふうには嘸き合ったものだ。紫野ですら、それも当然なのだろうと思っていた。だが隆之介は実に忍耐強く、恋や性といった要素を寄せ付けなかった。そんなふうで大丈夫なのだろうかと、紫野が心配するほどに。

最寄りのバス停に着いたが、紫野はベンチに座ることなく、じつと立っていた。丘の上なので風が強い。枯れ葉がカサカサと足元を舞って、力なく吹き飛ばされていく。

「ふっ」

いつの間にか、紫野の口から笑い声がこぼれていた。皮肉でねじれた、兄と妹の関係を思う。隆之介はいつだって、自分によくしてくれた。充分すぎる庇護を受けてきたことは、紫野が一番よくわかつてる。やさしくしてお人好しな兄は、報われて当然の存在だ。しかしその一方で、隆之介がもし本当に誰かと恋におちたら、紫野の居場所はなくなってしまふ。彼のやさしさはきつと、そんな事態を避けようとするだろう。それが紫野への裏切りだともいうように目ざわり、しあわせを阻む足かせ。まったくそのとおりだと、紫野は思った。私はいつだってそうだ。

口元の自虐的な笑みが消え、紫野の黒い瞳が静かに翳る。横顔を張りつめさせながら、彼女は一点をみつめた。頭の中で、紫野は数字を数え始める。5年と9か月。残り1年3か月。あともう少しで、否が応にもこの矛盾は終わる。そのときが来るのが恐ろしいようで、不思議と待ち遠しくもあった。そのとき、北風がバス停を襲い、ベンチがガタガタと震え、紫野の身体が小さくおののいた。バスはま

だ
来
な
か
っ
た
。

第9話

気付けば家はもう目の前だった。店を出てから30分ほど経っていたが、喋ったり、黙ったりを繰り返しながらの夜の散歩は、あつという間に過ぎていた。電気の消えた家は静かに、家主の帰宅を待っている。ヒールで坂を歩いていたため、紫野の脚はじんわりと疲れていた。無意識のうちに紫野がふくらはぎに手をやると、隆之介がめざとく声をかける。

「脚、大丈夫？　なんか結構歩いたよね」

「私は大丈夫です。お兄さんこそ、明日も仕事なのに、遅くなっちゃって」

紫野が首を振ると、隆之介は微笑んだ。

「いや、歩いたおかげで酔いがさめてよかった。それに、今夜はたくさん話せて楽しかったよ。いろいろ思い出して、懐かしくなった」
「うん……」

「ありがとうね、紫野ちゃん」

隆之介がお礼を言いながら玄関ポーチの段をあがろうとしたとき、ポケットから何かが震える音が響いた。立ち止まった彼が「おつ」と言いながら、スリムなデザインの携帯電話を取り出して開く。薄暗い夜道に慣れ切っていた紫野は、飛び込んできた液晶の光に目を細めた。

「あ、産まれたって！　よかったよかった」

メールを読んでいた隆之介が喜びの声を上げ、液晶画面を紫野に差しだしてくる。そこには、産まれたばかりと思しき、赤くてふにやふにやした赤ちゃんの写真があった。やわらかそうな産着にくるまれて眠っている。隆之介が画面下にスクロールすると、もう1枚、今度は赤ちゃんの身体に顔を寄せ、短髪の男が満面の笑みでピースしている写真が出てきた。後ろにベッドのパイプが写っていて、病室だということがすぐわかる。

「よく話してる先輩だよ。そろそろ産まれるって聞いてたんだけど、無事女の子が産まれたって。よかったあ」

「へえ……。なんだか、赤ちゃんなのに顔、似てますね」

「うん、確かに目のあたりとかがよく似てる。血のつながりってわかるもんだね。『娘だったら、頼むから俺だけには似てくれるな』って言ってたのに、やっぱり女の子は父親に似るのかな」

奥さんは綺麗な人なだけどねえ、とニコニコしながら、隆之介がその場でメールで返事を打ち始めた。紫野は少し後ろに立ったまま、今しがた見せられた写真を反芻する。

白く清潔そうな部屋。やわらかそうな赤ちゃん。満面の笑顔の親まさに、しあわせな家族の姿そのものだ。望まれ、祝福されながら産まれてき子ども。

「女の子は父親に似る、って本当ですよね」

紫野の言葉に、メール画面に集中していた隆之介は、そうだねー、と生返事をする。紫野が言った。

「私もそうだから」

隆之介の指が、送信ボタンを押した。「送信完了」の文字が表示されたのを見届けると、手の中で携帯電話を折りたたむ。ポケットにそれを滑り込ませ、隆之介が腰の高さほどのポーチの門に手を懸けようとした、そのときだった。

「お互い父親似だから、私とお姉ちゃんは似てないんです」

隆之介が顔を上げるのと同時に、センサー付きのポーチライトが反応して、あたりがパツと明るくなる。オレンジ色の灯りは、暗闇の中に立つ紫野の表情をくっきりと映し出していた。紫野は微笑んでいた。しかしそれは、長い時間が張りついたような、能面のような不思議な笑顔だった。何故か隆之介は瞬間的に、紫野がこのときに備えて、この表情をずっと準備してきたんじゃないだろうかという気がした。

隆之介は紫野の言葉の意味を咀嚼しようと頭をフル回転させたが、考えれば考えるほど答えが逃げていくようだった。紫野の言葉を証

明する、正しい方程式がみつからない。ごちゃ混ぜになり続ける思考に矢が刺さるように、紫野の声が隆之介の耳に飛び込んできた。それは実に明快な答えだった。

「私とお姉ちゃんは、父親が違うの。私、母が不倫してできた子どもだから」

隆之介はぽかんと口をあけたままだ。それを見た紫野はすつと頬の筋肉をゆるめ、今度はきわめて無邪気に、いたずらそうに“ネタばらし”を続ける。

「名前も、顔も、性格も違うのは、こういうわけだったのです」

「……はじめて聞いた」

開きつばなしの隆之介の口から、力の抜けた返事が漏れる。他にもっと言うべきことがある気がするのに、それ以上気のきいた言葉は出てこなかった。

「だって、はじめて言ったもの」

目の前の妹は、やはりいたずらそうに、さりげないことのように話した。こんなに重大な話なのに、まるで口ずさむように語るものだ、隆之介は思った。

紫野が手を後ろに組んで、隆之介の顔を見上げながらささやいた。「言ってなかったことがもうひとつあるの。お姉ちゃんが失踪した理由」

隆之介の目が見開かれる。もう一度ブー、ブーという携帯電話のバイブ音が響いたが、彼がポケットを探ることはなかった。その重低音は10秒ほど鳴ったあと、途端に静かになった。再び夜の静けさが住宅街を包み込む。暗闇の中で紫野の口の動きだけが、たったひとつ、命を持つ生き物のようだった。

「最後にもうちよつとだけ、話してもいい？　これで本当に、最後だから」

紫野は幼いときから、ほとんど泣かない子供だった。理由は簡単で、母親がよく泣いていたからだ。食事中や、風呂に入れてもらっ

ているとき、スーパーからの帰り道など、母は所構わず、思い出したように泣いた。今思えば、もうずっと情緒不安定だったのだろう。もともと保育園でも物静かなほうではあったが、母が泣けば泣くほど、紫野は自分の泣く機会を逸した。そのうちだんだん、涙自体が出なくなつた。

先に寝かしつけられた紫野が夜更けに目を覚ますと、ふすまの向こう側で母が泣いていることもしょっちゅうだった。そんなとき、中学生だった遼子が母を抱きしめて、だいじょうぶだいじょうぶとまるで子供をあやすように慰めているのだった。そこでは、母と娘が逆転していた。そうされて母は、「迷惑かけてごめんね」と更に泣いた。

その「迷惑」の原因が自分にあることを、紫野は本能的に理解していた。一度、母に連れられ、母の実家を訪ねたことがある。金の援助を頼むためだ。母は元はそれなりのお嬢様だったらしいが、己の不貞が原因で夫に離婚されたことで、体面を大事にする実家からも縁を切られていた。母の父らしき人物は、紫野を見て一言、吐き捨てるように言った。「その子か」と。

母に愛されていなかつたわけではない、と紫野は思う。家族3人で笑いあつた、しあわせな思い出もちゃんとある。ただ、母は困惑していたのだ。自分のしたことの大きさにいつまでも後悔していた。その結晶が、紫野だった。

第10話

それでも、紫野には遼子がいた。

仕事で手いっぱい母にかわって、紫野の実質的な世話は遼子が行っていた。母が弱っていくのと反比例して、遼子は強く、前向きに振舞った。遊びたいざかりの年頃だったはずなのに、嫌な顔ひとつしない姉を、紫野は慕った。

だから正直なところ、ある冬の日姉妹を残して母が死んでしまったとき、紫野はどちらかというと安堵する気持ちのほうが大きかった。もちろん、口にはしなかったが。傍から見れば救いようのない状況だというのに、「今後どうなるんだろう」という不安より、「どうにでもなるだろう」という思いが不思議と勝っていた。それは自暴自棄ではなく、静かな解放感と呼ぶほうがふさわしかった。これ以上、外で働くのが向いていなかった母に無理をさせることもない。目が合うたびに、ためらうような表情をさせることもない。大人だが感情の振幅が大きく、不安定な母のもとで生きるより、姉とふたりで生きることのほうが、ずっと地に足付いたことのように思えた。誰に教えられたわけでもないのに、そんなふうに感じてしまう自分は、やっぱり親不孝な子供なのだろう。

紫野の気持ちに気付いたのか気付かなかったのか、ひとしきり泣いたあと、遼子は紫野を抱きしめた。ささやかな祭壇が片付けられ、大人が去ったあとの公民館は、がらんと静かな空洞が広がっていた。姉が毅然とした声でささやく。私たち、だいじょうぶだよ。耳に直接姉の息がかかった。その生温かさに、紫野は感じた。ああ、きつと生きていける。小さな腕で、紫野は姉を抱きしめ返した。

「不倫とかの詳しい話を知ったのは、さすがにもつと後だけだね」
トレンチコートのポケットに手を入れ、皮肉めいた笑みを口元に浮かべた紫野が話す。真正面にいるというのに、隆之介には、彼女

の言葉が天からのナレーションのように聞こえていた。ゆらゆらと視界が揺れて、紫野の表情が闇夜にばやけて見える。彼女の美しい黒髪は、夜の繊維のようだ。

「不倫の子を産むなんて大それたことをしておきながら、ずっと夢の中にいるような母だった。身体を張って生きていくってことに、向いてなかったの。じゃあ最初から不倫なんてしなきゃよかったのにね」

紫野は目を細めた。彼女の淡々とした語り口は、隆之介に向かつて話すというより、だんだん独白に近づいてくる。

「だからこそ、お姉ちゃんに強く惹かれたのかな。顔も性格もあんまり似てない上に、母があんなだったから、姉というより、憧れの先輩みたいな感じだった。本当によくできた人でね。理想的な存在だった。この人なら間違いない、この人に着いていけば大丈夫……。陰は陽に惹かれる、って言うでしょ？」

見上げるような紫野の目が、ふいに隆之介の視線をとらえた。思わず隆之介の心臓が跳ねる。

「私、陰気だから」

ふふ、と紫野は笑った。そんなことはない、と否定したかったのに、何故か隆之介の喉からは言葉が出ない。

しばらく面白そうにしていた紫野だが、右手でくしゃくしゃと髪をかきあげてから首を一振りすると、潮が引くように真顔になった。姿勢を伸ばして改めて隆之介をみつめる。そのまなざしの強さに、一瞬隆之介はたじろいだ。

「でも今考えれば、お姉ちゃんだって高校生だったんだよ」

紫野の脳裏に遼子の姿が浮かぶ。高校を辞め、働き始めた遼子。やさしく、苦勞を厭わず、辛い顔を見せず、立ち止まったら死ぬと思っ込んでいた節さえあった姉。

実際、思っ込んでいたのだ。正確に言えば、思っ込まざるを得なかった。自分で自分に暗示をかけなければ、あんな苦勞は無理だった。

「母が死んでから、いえ、きつと私が生まれたときから、お姉ちゃんはずつと無理してた。なのに私、お姉ちゃんが元々そういう人なんだと信じ込んでたの。本当は、お姉ちゃんはいろんなものを犠牲にしていたのに」

だからその糸が切れたとしても、いったい誰が非難できるだろう？

「お姉ちゃんの様子がなんだかおかしいのは気付いてたけど、結婚前ってそういうものかなと思ってたし、私は受験に気を取られていて、自分のことばかりだった」

当時、食料品やシャンプーといった日用品の買い出しは紫野の仕事だったが、受験シーズンに入ると、それは免除されていた。年が明けて仕事を辞めた遼子は、結婚の準備のかたわら、甲斐甲斐しく妹の世話をしていた。

「一時、お姉ちゃんがだるそうにしてて、風邪がうつつたらいけないからって、3日くらい新居へ寝泊まりしに行っただけど……」
「え」

思わず隆之介が声を出した。そんな記憶はない。それにその頃はまだ、家具が家に運び込まれていなかったはずだ。寝泊まりできるはずがなかった。

隆之介の反応を見て、紫野は満足そうにうなずいた。

「やっぱりそうよね。あれも嘘だったんだ」

「いったい、どういうこと？」

隆之介の質問に直接答えず、紫野は昔語りを続ける。

「受験が終わって、私も久しぶりに掃除とかしなきゃなって、ドラッグストアに買い物に行こうと思ったの。で、棚をチェックしたら、明らかに減りが少ないものがあることに気付いた。その1〜2か月、私しか使った形跡がなかったの。おかしいじゃない？」

「……？」

「それで私、まさかそんなわけないと思しながら、帰って来たお姉ちゃんに訊いたよ。いつもみたいに笑ってくれると思ったのに、お

姉ちゃんは見たことないくらい傷ついた顔をして、私、全部わかってしまった。体調が悪かったのも、妙に上の空だったのも、そもそも結婚の話が出たときからぬぐい切れなかった引っかかりの正体も、全部」

一息で紫野は語る。過去の情景が、すぐそこで繰り広げられているかのように。静かで低い彼女の語り口は、何かに怒っているようでもあった。置いてきぼりをくらった隆之介が、慌ててその空気に飛び込む。

「ご、ごめん。言ってる意味がよくわからないんだけど……」

紫野がふらりと視線をあげ、隆之介を見た。困惑している彼を目に捉えると、数秒間息を止め、そしてゆっくり息を吐いた。

「お兄さんは、やっぱりぼんやりしてるね」

紫野はやわらかな苦笑を浮かべた。しょうがない人、というふう

に。
この秘密ひとつを言うことができずに、7年間ずっと逃げとおしてきた。叶うなら兄が自分で気付いてくれればいいと願っていたが、そんなのは都合のいい妄想だったらしい。自分のツケは自分で払わなければならないのだ。

紫野は一呼吸置いて、口を開いた。

「減ってなかったのは、生理用品だよ」

こんなによくできてくれた彼を最後の最後に裏切る自分は、本当に不孝者だ。母にも、姉にも、そして兄にまでも。

「お姉ちゃんは妊娠していました」

せめて目を見て伝えることが、自分の義務だと紫野は思った。

第10話（後書き）

べ々な展開ですみません・・・！

第11話

これから結婚しようという男女の間に妊娠が発覚したら、それは当然、祝福されるべきものはずだ。むしろ、これ以上なく幸せな状況のはずだろう。

隆之介は記憶の糸をたぐりよせようとする。あの頃、遼子に変化はあったか。言われてみれば若干ふっくらとしていたような気もするし、そうでないような気もする。隆之介は、7年の間に、自覚していたより薄ぼやけてしまった自分の記憶に焦れた。

ただ、ひとつ言えることがある。避妊を怠ったことはなかった、ということだ。もちろん、避妊に100%などないにしても。

「なんで……」

隆之介はつぶやいた。長い眠りから急に起こされたように、頭にもやがかかっている。

紫野が目をふせる。長く黒い睫毛が、白い肌に影を落とした。

「私、結局、お母さんと一緒だった」

「え？」

「そう言っただけ泣くお姉ちゃんを、私は呆然と見てただけでした」

紫野の脳裏に、あの日の姉の姿がよみがえる。

隆之介に出会う前から、姉には好きな人がいるのではないかと、紫野は漠然と感じていた。はつきり聞いたことはなかったが、一緒に暮らしていればなんとなくわかる。時がきたら、自分にも紹介してくれるのかもしれない。そう思っていたところで隆之介との婚約を聞かされたのだから、紫野が驚いたのも無理はなかった。

私、お母さんと一緒だったのよ。

その言葉を思い出すたび、この7年間、紫野の胸は疼いた。姉はどんな気持ちでそう言ったのだろう。許されない相手の子を宿す辛さを、母を見て知っていたはずなのに、自分がその被害者だったは

ずなのに、母のようににはならないと誓っていたはずなのに。

遼子の恋の相手は、既婚者だった。出会ったとき、貧しい生い立ちを告白した遼子に対し、逃げ腰になるでもなく、薄っぺらい同情をよこすでもなく、下世話な想像を働かせるでもなく、そして泣くでもなく、彼は黙って頭をなでてくれたのだという。

本当に、嬉しかったのよ。さんざん泣きはらしたあと、どこか遠くをみつめながら遼子はぼつりとつぶやいた。

「つまり要約すれば」

女にしては低めの紫野の声が、夜の空気を震わせる。もう午前1時を回っているだろうが、周囲の灯りは消え、風も冷えてきたが、ふたつの影はそこに立ちつくしたままだった。

「妹を育てなきゃいけない、身寄りのない貧しい女が既婚者を好きになっちゃって、でも諦めなきゃと思つて、そしたら都合よく御曹司に求婚されて、不毛な恋を振り切るためにそれを受けて、これでようやく苦勞することもないと思つたら、やっぱり彼のこと忘れられなくて、最悪のタイミングでデキちゃって、それが妹にバレて切羽詰まった拳句、何もかも置いて逃げたつていう……」

少し強い春の夜風が、ざわざわと木々を揺らした。風の音が鳴るほどに、隆之介の目には、妹の姿が不気味なほどくつきりと白く浮き上がっていくように見えた。

「たった、それだけの話だったんです」

紫野の顔が奇妙にゆがんだ。笑っているのか、情けないのか、恥じているのか、怒っているのか、それともそのすべてが入り混じっているのかもしれない表情。

「全部知つてて、お兄さんのこと、ずっと騙していたんです」

それが7年間におよぶ風変わりな兄妹関係の、お粗末なカラクリだった。

隆之介は思い出す。遼子に一目ぼれした日。その後のトントン拍

子な展開。常に明るくふるまっていた遼子。姉妹とはじめて会ったファミリーレストラン。浮かれていた自分。薄汚れたアパート。ずっと疑り深く自分を見ていた、セーラー服姿の紫野。

「気付くべきだった。」

生活のすべてを支えていた、たったひとりの身内を失ったとき、15の少女にできることなど何があるだろう。紫野は聡明な子だった。自分の置かれた絶望的な状況で、どうすることが一番賢明かを瞬時に考えたとき、取るべき行動などひとつしかないではないか。

「そりゃあ、そうだよねえ……」

沈黙を破り、隆之介はくすくすと笑いだした。予想外の展開だったのか、身構えていた紫野が一瞬ビクツとする。

隆之介は顎に手を添えて、思い出し笑いするように身体を震わせた。

「我ながら、ほんと間抜けだね。とつくの昔に捨てられてたのに、気付かないで」

「な、なんで笑うの!？」

「誘拐とか事件とか、夢みたいな想像をふくらましては自分を納得させてたけど、ちよつと冷静になって考えれば、すぐわかることなのにさ。あーあ、周りのみんなは呆れてたんだろっなあ」

隆之介は肩の荷が下りたように、レンガ床にどさつと腰を下ろし、くしゃくしゃと後頭部をかいた。紫野は彼の思わぬ行動に困惑しながらも、ためらいがちに、ポーチの段に膝をつくようにして向い合せになる。

「失恋、したって認めたくなかったのかなあ」

紫野は思わず隆之介の顔を見た。兄はポーチの扉にもたれかかりながら、静かな笑みを浮かべてこちらを見下ろしていた。そんな表情の彼を見るのははじめての気がして、紫野は何故だか心臓をグイッと掴まれたような感覚を覚える。

隆之介の口調には、ずつと前から答えを知っていたような響きす

らあった。

「……怒らないんですか？」

「むしろ、ごめんね。僕がもつとはやく気付くべきだった。紫野ちゃんに余計な気を使わせてしまった」

「そんなんじゃない。私は騙してて……」

「君のせいじゃないよ」

「私のせいだよ！」

紫野が突然大声で叫んだ。同時に隆之介の左手首を掴んだ彼女の右手が、小刻みに震える。

「私にみつきりさえしなければ、お姉ちゃんは中絶するなり、お兄さんに相談するなり、別の方法を取っていたと思う。少なくとも失踪なんてしなかった。でも私が気付いちゃったから……。お姉ちゃんが必死に築いてきたものは、全部私のためだったんだよ。そもそも私が生まれてなきゃ、お姉ちゃんはこの目に遭うことなかった。それでも妹が可哀想だって、お母さんを反面教師にして、良き姉としてひたすら頑張ってきたのに、それを当の私がぶっ壊しちゃってどうすんの！？ 妊娠なんて気付かなきゃよかった。そしたらお姉ちゃんはいなくならなかった。何もできない子供のくせに。私はあるとき」

憑かれたようにまくし立てていた紫野が、言葉を止めた。

浅く息を吸う。埋もれていた記憶を引き上げるように。その瞬間、けわしかった紫野の顔から波が引くように感情が去り、虚無に近い哀しみの表情だけが残った。隆之介は思わず息をのむ。それは紫野の、自分自身に対する深い失望だった。

痛いほどの力で、紫野は隆之介の手首を握った。

「お姉ちゃんに、だいじょうぶだよって言えなかったの」

夜に舞う桜の花びらのように、その言葉は儚く闇に消えていった。

第12話(前書き)

6月21日、後半を大幅改稿

第12話

ときどき、紫野は夢を見た。

ダイニングテーブルで、ジャガイモの皮をむいている。隆之介の実家から大量に野菜の差し入れがあったので、今日はポトフをつくるのだ。昨日の晩に漬けておいたマリネも、今頃いい感じに味がしみ込んでいるだろう。

隆之介はリビングのソファに寝転んで、読みかけの雑誌を開いたまま、うとうととしている。今週は仕事が立て込んでいたらしく、ちよっと疲れ気味のようなのだ。そうでなくとも、日曜の夕方ほどまどろむのに適した時間帯もないのだが。

そのとき扉が開いて、遼子がひよっこりと顔をのぞかせた。

「ただいま」。わ、すごい量のジャガイモ」

「おかえり。なんか無農薬のいいやつなんだって。お兄さんのお母さんから送られてきたよ」

「あはは、無農薬って、自分たちは製薬会社なのにね。これ、おみやげだよ。留守番ご苦労さまでした」

遼子は笑って、プリンの入った箱を差し出した。紫野の好きな店のものだ。

「彼は？」

「あそこで寝てるよ」

「あー、相変わらず子供みたいな寝顔」

起こさないように遼子は忍び足でソファに近寄り、満足そうに隆之介を見下ろした。紫野も自然と顔がほころぶ。

「幸せな夢でも見てるんじゃない？」

夢を見ているのは、自分じゃないか。

いつも、そこで気付いた。夢はまだ続いていて身体もぼんやりとしているのに、意識だけが、突然冷水をかけられたように覚醒して

しまうのだ。

紫野は起きたくなかった。かといって、もう一度眠り直すこともできそうにない。そんなときは、ただ死体のように横たわったまま、ベッドの上で、強烈な自己嫌悪と絶望的なむなしさを持って余すだけだった。このまま本当に死ねたらいいのに、と紫野は思った。

無意識とはいえ、都合のいい妄想をいつまでも捨てられない自分を紫野は呪った。姉はきつと戻らない。彼女を追い詰めたのは、他でもない自分なのだから。

わかっている。それでも待つてしまうのは、この家に住んでいるからだ。隆之介との“兄妹ごっこ”が長引けば長引くほど、妄想が真実のように思えてきてしまう。ある日、何事もなかったように姉が帰ってきて、たった今夢で見た暮らしが現実になるんじゃないかと、まだどこかで期待してしまう。

紫野は目を閉じて、奥歯をかみしめる。はやく、はやく、ここから出ていかなければ。何度もそう思っているのに、ベッドから動くことすらできない。体温がなじんだシーツは、やわらかく、なまぬるかった。

「兄妹ごっこ」

紫野が唐突につぶやいて、握っていた隆之介の手首を離した。同時に、唇の端を持ち上げて笑顔をつくる。さっきまでの表情が嘘のように、見慣れた、いつもの紫野の薄い笑みだった。しかし隆之介は笑えなかった。床に尻をつけて扉にもたれかけ、何か言いたげな目で紫野をみつめている。

「それも今日で終わり。……実はね、昼間のうちに荷物を出したの。この家にはもう、私のものは何も残ってないよ」

それまで隆之介ににじりよる姿勢で静止していた紫野は、身体を起こすと、膝の土を払いながらゆっくりと立ち上がり、道路側を向いて伸びをした。

「まあ、荷物なんてほとんどなかったけどね。家具も家電も食器も

全部。最初から、この家には私のものなんて何ひとつなかった」

「出てくつて、本気で言ってるの？」

声を裏返させながら、隆之介は尋ねた。

「本気だよ」

振り返った紫野は、静かな笑みを浮かべていた。白い月の光が頬を照らしている。それはなぜか、ひどく神聖な印象を隆之介に与えた。

「今日を、ずっと待っていたんだから」

紫野は再び隆之介の目の前に戻ると、しゃがんで目線を同じ高さに合わせて。迷子になってへたりこんだ小さい子どもに語りかけるような構図になった。

「……民法第30条、失踪の宣告」

隆之介の喉から、あ、という音が漏れた。

「『不在者の生死が七年間明らかでないときは、家庭裁判所は、利害関係人の請求により、失踪の宣告をすることができる』。民法第31条、失踪の宣告の効力。『前条第一項の規定により失踪の宣告を受けた者は同項の期間が満了した時に、同条第二項の規定により失踪の宣告を受けた者はその危難が去った時に、死亡したものとみなす』。これ、お兄さんも知ってるでしょ？」

隆之介は訴えるような目で首を振った。もちろん知らないという意味ではない。

「私の中で、お姉ちゃんは、今日、死にました」

かみしめるように、紫野は言った。

「これで法律上、お姉ちゃんは死ねる。そしたらお兄さんと結婚することはできなくなる。つまり、私とお兄さんの間に何の関係もなくなる」

隆之介もその内容は知っていた。紫野がいなくなった当時、失踪に関する書籍を読みこんだからだ。だが、有り得ないと思っていた。「まさか、請求するつもりじゃないよね？」

「お兄さんが望むなら、するよ」

「望まないよ！」

思わず、強い声が出た。

「そう言うと思った」

だが、紫野は満足そうに笑った。顔を隆之介に近づけ、ささやく。「でも、理由としては充分でしょう？ 7年も帰ってこなかったら、世間的にはそれは死んだも同然ってことだよ。周りの人だって理解してくれる。なんなら、私が本当に請求したことにして話してくれてもいい。きつとみんな、しょうがないね、今までよく頑張った、ってなぐさめてくれると思うから」

紫野は、両手をポーチの扉にかけた。カシャン、という硬い音が響く。これ以上なくふたりの距離が縮まり、隆之介は紫野の両腕に包まれているような形になった。隆之介はめまいをおぼえる。深夜に、こんな場所で、こんな姿で、紫野とこんな話をしていることが、とても現実とは思えなかった。しかし首筋にかかる紫野の吐息が、幻ではないことを証明していた。なまあただった。

「今まで、本当にごめんなさい。嘘ついて、騙して、こんなふうに裏切って。許されることじゃないと思ってます。お兄さんのやさしさにつけこんで、つい甘えてしまった。だから、もう行きます」

「そんな、もうちょっと待って……」

「待ちたくないの、これ以上」

紫野の鋭い声が、ゆらぐ隆之介の視線を切った。

言葉を吐き捨てた唇は静かに結ばれ、紫野の黒い瞳が翳っていく。紫野は隆之介に身体を寄せた姿勢のまま、強張った表情で、虚空をみつめた。ふたりの呼吸が止まる。空気がぴんと張り詰める。

それがひとりで何かを待っているときの、紫野の表情。

隆之介はようやく理解した。

なぜ今まで気付いてやれなかったのだろう。

紫野はただ、ずっと怖れていた。

誰も帰ってこないことを。

自分が不要になることを。
それが現実になることを。

その怖れを封じ込めようとするとき、人はこんな表情になるのではないか。

「……それじゃあ」

紫野が急に立ちあがった。隆之介の身体に触れていた重みと温もりが消える。かわりに、冷えた夜の空気が流れ込んでくる。ひやりとした空気が、隆之介を我に返らせた。

「紫野ちゃん！」

慌てて立ちあがり、紫野に手を伸ばす。だが紫野はするりと身体をひねり、隆之介の指先から逃れた。そのまま軽く跳ぶようにして後ろ歩きで数歩下がると、ぴんと背筋を伸ばして立った。

月を背にした紫野の視線は、まっすぐ隆之介をとらえていた。

不意に紫野が身体を曲げ、深々と頭を下げた。ゆるやかに時間をかけながら、完璧な弧が描れていく。それは、これ以上ないほどの最敬礼だった。一連の動きがあまりにもなめらかで、隆之介は立ちつくしたままだった。音のないスローモーションの舞台に紛れ込んだ観客のように、紫野の姿にみとれていた。

ゆっくりと、紫野は上半身を起こした。

再び隆之介と視線が絡み合う。その視線の強さに、隆之介は一瞬ひるんだ。だが意外なことに、次の瞬間、紫野は思いきり笑った。

これまで隆之介が見た中でも、とびきりの笑顔だった。

「さようなら」

このたった一言を言うために、長い長い時間を費やしてきたのかもしれない。満面の笑みをつくりながら、紫野は思った。

「7年のあいだずっと、妹でいさせてくれてありがとう」

紫野は笑っていた。笑いながら泣いていた。

立ちつくす隆之介の前で、ぼろりぼろりと涙が生まれては落ちる。鮭の産卵のごとき勢いだった。7年間溜めこまれた分を一気に放出するかのようになり、とめどなくこぼれ落ちる涙の粒は大きく、透きとおっていた。

紫野は小さく息を吸うと、くるりと振り返った。そして隆之介の呼ぶ声を後に、夜の闇へと駆け出した。

第12話（後書き）

異常に苦勞して、更新が遅くなりました。すみません。
次回で終わる・・・かな？

第13話

「紫野ちゃん、待って！」

隆之介の呼ぶ声もむなしく、紫野は振り返ることなく駆けていく。ヒールの硬質な音が響いた。深夜とはいえ、坂を下ればタクシーがつかまえられる。乗ってしまったら、さすがにもう追いつけない。隆之介は唾を飲み込む。今、追いかけていなければ。

しかし足を踏み出すことを、隆之介は一瞬躊躇した。弾かれたようにまっすぐ走る紫野。その後ろ姿には、何かを必死で振り切ろうとする頑なさが滲んでいた。

紫野の性格のことだ、きつと二度と戻らないつもりで、用意周到に今夜を迎えたに違いない。実際、紫野の思惑も、引越しの準備を進めていたことも、そして彼女がひた隠しにしてきた秘密も、隆之介はちつとも気づけなかった。

紫野がラクになるというのなら、立ち去ることを止める権利など、自分にあるだろうか。彼女の言うとおり、もはや紫野と隆之介の間には何のつながりもない。それどころか、隆之介と暮らすことが、間接的に紫野を苦しめてすらいいたのだ。兄失格と罵られても仕方がない。もう紫野も大人なのだから、今夜で全てを終わりにするといふのなら、その意志を尊重してやるべきでは。 。

洪水のように溢れかえった理性は、そこで途切れる。

「なんだ、そりゃ」

思わず口をついて出た。それが隆之介の答えだった。

次の瞬間、勢いよくアスファルトを蹴って、隆之介は走り出していった。一つ目の角を左に曲がる。カーブする際の、ほんの少しの時間のロスでも今は惜しかった。勢いをつけたまま、両腕を動かして走り続ける。ネクタイがバタバタと動くのが邪魔で、右肩に放り投げる。携帯も捨ててくれればよかった。前髪と額の間からじんわりと

汗が流れ出す。ひゅう、というかすれた息が喉から漏れた。

通い慣れたはずの道順なのに、はじめて見る景色のようだった。ひんやりとした街並みのなかで、隆之介の身体だけが熱を放っている。突き放されているような異物感が、かえって心地よかった。汗を手の甲でぬぐいながらも、足は止めない。息があがる。これほど全力で走ったのは、遼子が失踪した日以来だった。

この姉妹だけだ、自分をこんな気持ちにさせるのは。

隆之介はバス通りに出る角を曲がった。視界が開ける。と同時に、数メートル先に紫野がいた。

「紫野ちゃん！」

後ろ姿の紫野の肩が、ビクツと跳ねた。まさかここまで追いかけてくるとは思っていなかったのだろう、速度を少しゆるめていたらしい紫野は、しかし振り返ることなく、再び大股で走り出そうとする。隆之介はもう一度、かすれる声で叫んだ。

「紫野！！」

7年一緒に暮らして、はじめて呼び捨てで名前を呼んだ。

紫野の動きが止まる。

両膝に手を置き、隆之介は肩で息をする。むせそうになるのをなんとか押さえながら、紫野の背中に呼びかけた。

「言い逃げなんて、子供っぽいこと、しないでよ」

珍しく語気を強めた隆之介の声は、しんとした夜の空気に、糸電話の糸のように振動した。

「自分さえいなくなれば全部解決するとか本気で思ってるの？ バカだよ。身勝手すぎる」

紫野はぴくりとも動かない。

「似てないとか言つてさ、そういうところ……遼子そっくりじゃん」
額から溢れた汗が、眉の先を辿り、目頭に垂れた。塩の味が眼球に沁み込む。その刺激に隆之介が顔をしかめると、紫野が横顔だ

けで振り返ったのはほぼ一緒だった。

紫野の眉はへの字にゆがんでいた。こちらを睨みつける瞳からは、相変わらずぼろぼろと涙がこぼれている。上気した桜色の頬。固く結ばれた唇。

まるで叱られた子供の表情だった。同時にそれは、かつて隆之介に見せたことのない表情だった。

うるんだ瞳が大きく揺れた。

黙っていた紫野が、ゆっくりと口を開く。

「なんで、そんなに怒るのよ……」

隆之介は虚を突かれる。それは、普段の紫野からは想像できないほど無防備な声音だった。次の瞬間、隆之介は苦笑していた。

「さつき、怒れって言ったの紫野ちゃんじゃ」

言いながら、隆之介の肩の力がほどけていく。口元に自然と笑みが溢れた。固く閉じていた心臓に血液が流れ込むのを感じる。

隆之介は確信して、紫野へと歩んだ。思ったとおり、紫野は逃げなかった。困ったような怒ったようなすねたような表情を浮かべながらも、大きな力に足首を捉えられたように、その場に立ちつくしていた。紫野はそこで待っていた。

駆け寄りたかったが、そうすれば紫野が逃げてしまうような気がして、隆之介はゆっくりと歩いた。確実に、大股で紫野に近づく。ちゃんと触れるまで安心はできない。五歩、六歩、あと一歩。

隆之介は紫野の手首に腕を伸ばした。細く、しかし温かい白い手首がそこにあった。隆之介の手の中に収められる。

つかまえた。

安堵の息を吐こうとしたそのときだった。

グギ、という鈍い音がした。正確には、身体の中の骨を通して振動が響いた、という言い方が正しいかもしれないが、隆之介にそんなことを考えている余裕はなかった。左足首に激痛が走る。マズい。

痛み of 正体を悟ると、紫野の手首を掴んだまま、仰向けに身体が崩れ落ちるのは同時だった。突然の展開に、紫野がぼかんと口を開くのがスローモーションで見えた。その彼女を思いきり引っ張りつつ、隆之介の視界は反転した。

永遠にも思えた刹那ののち、なす術なく背中から倒れた隆之介は、後頭部を見事にアスファルトに打ちつけた。

頭の中に釣鐘を無理やりはめ込まれたような振動、そして鈍い痛み。ただでさえ足首が砕かれたように痛いのに、そのうえ後頭部までもとは。閉じたまぶたの前がぐわんぐわんと揺れる。一瞬、意識が飛びかけた。

「いったあ……」

だが、紫野のうめき声がそれを許さなかった。手首をつかまれたまま隆之介の転倒に巻き込まれた紫野は、彼の胸を横断する形で覆いかぶさっていた。右半身からコケたらしく、右腕を支柱にし、よろめきながら隆之介の上で上半身を起こす。

「なに？ なんなの？ なんでこのタイミングで転ぶの!？」

ぶっ倒れたままの隆之介の頭上から、紫野の罵声が降ってくる。朦朧とした意識のなか、目を閉じたまま隆之介は力なく返事した。

「ごめん、なんか、足挫いたみたい……」

「はあ!？」と紫野が叫ぶ。

「信じらんない。お兄さんって、ほんつとドジ!」

呆れ果てた紫野の声が遠くから聞こえた。相変わらず頭はガンガンと痛むが、なぜだか隆之介の口元はほころんだ。

「だって、あんなに走ったの久しぶりだったんだよ……。ほんとごめんね。怪我、ない?」

「私のことより、自分のこと心配するべきでしょう。ねえ、大丈夫? ものすごい音したよ?」

自分を覗き込む気配を感じ、隆之介はゆっくりとまぶたを開けた。ぼんやりとかすむ視界。その向こう側で、よく知った姿が、慄然と

した表情を浮かべている。

黒髪で、色白で、遼子とはまるで似ていない女の子。なんの運命のいたずらか、投げ出された者同士、7年間もふたりきりで暮らし続けた。大人っぽいのに変なところで幼くて、器用がゆえに不器用で。血のつながりも姻戚関係も何もなくとも、それを家族と呼ばないなら、いつたいなんと呼ぶのだろう。

すべての焦点が合った。

そこにいるのは、他の誰でもない、妹。

紫野。

隆之介は両腕を伸ばし、紫野の背中に回した。そのままぐいと胸に引き寄せると、紫野が抵抗する前に、あらん限りの力でその細い身体を抱きしめた。

「な……」

あまりにも予想外の展開だったのか、紫野はそれきり言葉を失っていた。抱きしめられた姿勢のまま、狼狽しているのが伝わる。

彼女の体温を感じつつ、隆之介は空を見た。夜空を背景に桜がはらはらと舞って、自分たちに向かって落ちてくる。時を忘れさせるような光景だった。

夜空を見たまま、隆之介はぼつりと口を開いた。

「本当に出て行きたいなら、止めないよ」

腕の中で、紫野が少し身を固くする。

「というか、紫野ちゃんも社会人になるわけだし、いつまでも一緒に暮らしてるほうが逆に不自然なんだよね」

こんな夜中に路上に寝転がって妹を抱きしめている兄のほうもたがいがい不自然だろうが、今はもうすべてがどうでもよかった。

心臓の鼓動がどんどん早まっていくのを、布越しに感じる。紫野の心臓の音が、それとも自分の心臓の音か。あるいは両方かもしれない。なかった。

「この7年間は、本当に紫野ちゃんのおかげだったと思う。少なくとも

とも僕はそう信じてる。……もつとはやく、ちゃんと伝えていたら、紫野ちゃんがここまで悩むこともなかったのかもしれないけど」

紫野がふるふると頭を振った。細い髪が隆之介の手の甲の上で踊った。

「だから、愛想尽かされても仕方ないし、新しい人生を歩むなら、それは止められない。だけど……」

声が震え始める。それに呼応して、隆之介の指先にも力が入らなくなってくる。もう一度だけ、彼は腕に力を込めた。

「たまには遊びに帰ってきてよ。実家だと思ってさ。……待ってるから」

第13話（後書き）

中途半端なところで切って申し訳ありません。

次回確実に完結します。

それにしても、「抱きしめる」って書くだけで緊張しますね・・・

最終話

そこまで言って、限界だった。

身体中の栓がゆるめられたかと思うと、隆之介の視界がみるみるうちに再びぼやけ始める。鼻の奥から、ふご、ずご、と変な濁音が鳴った。それを合図に、隆之介の涙腺は決壊した。涙と鼻水が同時に溢れ出た。

「だ、だから、し、」

ひっ、ひっ、としゃっくりのように胸が震える。とても言葉を紡ぐことができない。

「なんで、お兄さんが泣くのよ……」

いつの間にか紫野が、隆之介の腕からすり抜けていた。腕組みして隆之介を見下ろしている彼女の瞳からは、すっかり涙が乾いてしまっている。さっきまで大量の涙をこぼしていたとは思えないくらい、体温の低そうな、いつもの紫野に戻っていた。

「明日、ご近所の噂になるかもよ。夜中に、男がすすり泣く、不気味な声が響いてたって」

「だっ、」

だって、と言い終わる前に紫野に手を引っ張られ、隆之介は上体を起こした。ありがとう、と言いかけるが、また「ずず」という濁音に阻まれる。おいおいと涙を流す無防備な30男を見て、紫野はため息をつく。走るわ転ぶわ泣くわで、彼のスーツはぐしゃぐしゃに皺が寄っていた。きつと安くないスーツだろうに、これはすぐにクリーニングを持って行かないと……そこまで考えて、紫野は気づいたように顔をしかめ、再びため息をついた。

「救急車呼びます？」

「だいじょうぶ、歩けるとおも……ぐえっ」

隆之介が立ちあがる。しかしそう言ったそばからグラリとふらつく、イルカが絞め殺されるような声を発した。

紫野は3度目のため息をつく、右肩を差し出した。

「……つかまって」

隆之介が申し訳なさそうにする間を与えず、紫野は隆之介の腕を自分の肩にかけると、無言で歩き始めた。

「い、いいよ！ 大丈夫だから」

「黙っててください」

離れようとする隆之介の腕をがっちり掴んだまま、紫野は隆之介を振り向くことなく、黙々とまっすぐ歩いていく。まるでワルキユレみたいだと、足をひきずりながら隆之介は思った。戦場の死者を回収してまわるという、北欧神話の伝説の乙女。

戦死した自分を想像して、隆之介は思わず笑った。戦場ではきつと役立たずに違いない。前線ですっ転ぶ自分が容易に想像できた。

「何が面白いの？」

急ににやけた隆之介を、紫野が不審そうに横目で見る。

「いや、やっぱりダメな兄だなと思って」

「もう慣れましたよ」

紫野がふつと笑った気がした。

オーデインの館ではなく、丘の上の白い家へ。ぼやけた月に照らされながら、ふたつの影はゆっくりと歩いた。

翌朝隆之介が目を覚ますと、階下からバターの匂いが漂ってきた。左足を浮かせながらそろそろと階段を下りると、紫野がちょうどフレントリーストを焼き終えたところだった。

「おはよう」

テキパキと皿に盛り付けながら、紫野が振り返った。それがあまりにも自然だったので、一瞬、隆之介は昨夜のことを疑った。あれは全部自分の夢だったんじゃないか。だが次の瞬間、否定する。足首の痛みが事実を物語っていたし、紫野の格好を見てもそれは明らかだった。身なりに気を使う紫野は、けっして2日連続で同じ格好をしたりしない。しかし今日の紫野は、昨日と同じワンピースを着

ていた。紫野いわく、「こんなことになると思っただけで、着替えを持ってなかった」のだそうだ。彼女の言っていたとおり、家からは紫野の荷物がきれいに無くなっていた。特に紫野の部屋は、ベッドメイキング後のビジネスホテルのように、塵ひとつなく正しく整理整頓されていた。

「……おはよう。いい匂いだね」

「食パンがあつたんで、フレンチトーストにしてみました。多めに作ったから、冷凍しときます。よかったら週末にでも食べてください」

「お皿、運ぶよ」

「怪我人は座っててください。結局、病院行くことにしたんですか？」

「ああ、うん。さっき会社に電話して、午前半休にしてみました」
フレンチトーストが運ばれてくる。甘い香りが、ダイニングテーブルの上に弧を描いた。横にはミルクたっぷりの紅茶。鼻孔を刺激される。

「いただきます」

紫野が席に着いたところで、隆之介は手を合わせた。ナイフを入れると、フレンチトーストの黄金の腹がぐにゅ、と甘美に曲がった。一口切って口に入れると、香ばしさが瞬時に脳まで達し、なんともしあわせな気持ちになる。

「なんだか、ものすごく美味しい」

「別に、普通のレシピですけど」

「いや、本当に美味しいよ」

「昨日いっぱい泣いたからじゃない？」

紫野が淡々と言った。隆之介が紫野の顔を見る。紫野は規則正しく手と口を動かしていた。

「泣いたら疲れて糖分がほしくなる、とか言うじゃないですか」

その理論から言えば、紫野も隆之介と同じ具合のはずだったが、それを口に出して揶揄するのははばかられた。隆之介は視線を手元

の皿に戻す。

自分が知る限り、紫野は7年ぶりに泣いたはずだった。もしかしたら隆之介の預かり知らぬところで泣いたこともあったのかもしれないが、昨夜の様子を見ると、やはりあの涙は特別だった、と思う。暗闇の中でとめどなく涙を流す紫野の姿が、隆之介の目にはくつきりと焼き付いている。だがこうして日が昇ってみると、遠い昔の幻のようにも感じられた。少なくとも目の前の紫野の表情からは、昨夜の出来事の影響は少しも感じ取れなかった。

「病院って、駅前コンビニの上の整形外科？」

紅茶をすすりながら紫野が訊いた。隆之介ではなく、窓のほうをぼんやりと眺めている。外は快晴だった。

「うん。あそこの先生にはずっと見てもらってるし」

「じゃあ、下まで付き添いますよ。そこから私、駅に行くので」

それはつまり、予定の半日遅れで、新居に向かうということだろう。結局、紫野がこの家を出てどこに行くのか、隆之介は知らないままだった。訊くタイミングを逃してしまっていたし、一晩明けた今、隆之介は自信がなくなっていた。

昨日の自分が伝えた言葉は、まぎれもない本心だ。紫野にもちゃんと伝わったと思う。だが、確約を得られたわけではない。家を出てどうするかは、紫野が決めることだ。二度と帰って来ない可能性は充分にあった。だが、そのことを改めて話題にするのは野暮な気がして、隆之介はフレンチトーストの最後の一切れを口に含んだ。

30分後に家を出た。ドアを開けた瞬間、日差しの強さに隆之介は思わず目を細めた。玄関ポーチの扉が、光を鈍く反射している。昨夜の名残は、太陽によってすっかり塗り替えられ、更新されていた。

ほとんど無言でふたりは歩いた。バスに乗って10分ほどで、駅前のロータリーに着いてしまう。バスが揺れるたび、隆之介は吊革につかまる紫野の横顔を眺めたが、紫野は何も言わなかった。

病院の並びにクリーニング店があり、紫野は隆之介を外に待たせたまま、店に入って行った。戻ってきた紫野は控えを隆之介に手渡す。

「来週にはできてるって」

「ん……」

心ここにあらずで、隆之介は控えを財布に収める。やはり紫野はいつものとおり、淡々としていた。紫野は病院の看板をちらりと見ると、隆之介に向き直った。

「私はここで」

ついに来てしまった。覚悟していたはずなのに、隆之介は紫野の顔をまつすぐ見られず、バッグに添えられた彼女の手視線を合わせる。昨日、自分が握った細い手首。珍しく大胆な行動に出られたのも、夜というマジックのおかげだったのだろうか。

「うん、それじゃあ……」

何か言うべきだと思っているのに、何を言うべきかわからなかった。紫野も何も言わなかった。コンビニへ向かう客が、隆之介の横を通りすぎていく。その流れに身を任せるように、隆之介は足を踏み出した。

「またね、お兄ちゃん」

空耳かと思った。

だがそれは紛れもなく紫野の声だった。自分がいよいよ発狂したのでなければ。駅前のざわめきをすり抜け、その言葉は一筋の光のように、隆之介の耳に差し込んできた。

振り返ると、同じ場所に紫野はいた。いたずらそうな上目づかいで、うつすらと笑みを浮かべて。暑さのせいか、白い頬がほんのりと染まっていた。

唾然としていたら、突然、プツと紫野が嘔き出した。ますます唾然とする隆之介をほったらかしにし、くっくっくと声を漏らしなが

ら、小刻みに肩を震わせている。それも押えきれなくなったのか、ついには声をあげて笑い始めた。

「あー、やっぱりキヤラじゃないわ」

目の端に涙すら浮かべながら、紫野は笑った。

「もう二度と言わない」

つられて、隆之介も笑った。道行く人が怪訝な顔をするのもお構いなしに、ふたりは笑い続けた。

8年目の光が、過去も未来も等しく照らすように、風変わりな兄妹の上で輝いていた。

完

最終話（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

ここからは、僭越ながら後書きのようなものを書きたいと思います。ご興味のある方はどうぞお読みください。

ゴールデンウィーク前に、急に思い立って書き始めた作品でしたが、小説を書くのがぼぼはじめてということもあり、予想以上に大変でした。想定したより長い話になってしまい、反省する個所も多々ありますが、ひとまず書きあげられたことに満足・安心しています。これからまた全体を推敲して、より良い形に直していくつもりです。

「さよならお兄ちゃん」のアイデア自体は、実は5年ほど前からありました。ただ、小説を書きあげるなんてムーリー！という感じで、いつか何かの形で発表できたらいいなあ、くらいに考えていました。ちなみにそのときは恋愛モノとして構想しており、姉が失踪した理由も違いました。小説情報に「ほのかに恋愛要素も含まれる」と書いていたのはこのためで、実は書き始めてからも、結末をどうするかしばらく決めていませんでした。オリジナルに添って、隆之介と紫野をくつつけることも考えていました。

ただ不思議なもので、物語って書き始めると自分でも予期しなかったほうに動き出すというか、登場人物が自然に動いてくれるようになり、「このふたりじゃ、やっぱり恋愛はないな！」という結論に至り、このようなラストとなりました。

小説を書きたい、というよりはこの話を書きたい、という気持ちのほうが強かったので、今後「小説家になろう」で定期的に作品を発表できるかどうかは、私自身よくわかりません。ただ、「いやいや

官能小説を書いている女の子の話」や「クイズに青春をかける冴えない少年少女の話」など、書いているうちに新たにアイデアが湧いてきたのも確かです。

執筆中にインスピレーションをもらった音楽を記載しておきます。

Snow Patrol - 「Hands Open」 「Run」
「Take Back The City」など

ベスト盤『Up To Now』を、勝手にこの作品のサントラだと思って聴きまくっていました。特に「Run」は別れの歌詞だったので、いろいろ思うところがありました。

トルネード竜巻 - 「言葉のすきま」

静かでせつなくリリカルな楽曲で、こういう雰囲気の文体が書ければなと思っていました。

「伝えたいことがいっぱいでも言えることは少なくて

でも そうでしょ？ せつないのと痛いのがあいだをちゃんと言おう」

という歌詞がとても好きです。

Natalie Imbruglia - 「Smoke」

息苦しくどこか突き放した乾いた感じが、紫野の心情にぴったりだなと勝手に思っていました。

最後に、お読みいただき本当にありがとうございました。

感想・評価等お待ちしております。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1472/>

さよならお兄ちゃん

2010年12月5日04時55分発行